

## ソ連に抑留されて忘れられぬこと

栃木県 佐藤 充男

奉天にて終戦の我々部隊は、幾日か近隣を行動したあげく、黒河を船で渡り、チュレンホーボアの炭坑に入坑したわけであるが、奉天にて名簿を作製したときに、部隊長と相談して、なまじそれぞれの職業を明記すると行き先が不安だということで、全員職業は農業にしてみました。ところが、全員炭坑となったようだ。このあたりに失敗があった。我々の生まれ環境の仕事といえ、その仕事が終わると時間が短縮されてきたいわゆるこまわり作業だったので、一気にその仕事を完遂してしまいう習慣があったが、ソ連においては何でもかでも八時間という時間の制約が第一番だったことになじむことにも苦労した。

私の収容所は、関東軍の部隊と我々の二個部隊の三千人からの大世帯であり、他のほとんどの収容所は千人程

度だった。

この炭鉱（露天掘）に働く相手は、ドイツに捕虜になったソ連人であり、なぜ逃げ出さないかと尋ねたら、ここ以外ではパンの配給がないから生きられぬとのこと、まさに格子なき牢獄であった。

一番ひどかったのは食事であり、作業の能率によって、一〇〇%、八〇%、六〇%と支給に差異があったことであり、主食は黒パンだったが、その量は生きること、に精いっぱいのものであった。仲間同士の食事の奪い合いも見られた。こんな状態から、生きるだけに精いっぱい、の食事は、体力を維持することはできず、爪は伸びず、頭髪、髭等も全く伸びずに、散髪を必要としなかった。従って、死亡した者の遺髪は眉毛を切りおとした。生命を維持するに精いっぱいだったわけである。

シベリアの寒さはこれまた格別で、零下二十度、三十度はいつものことだった。マスクをかけていると、眉毛につららが下がり、顔全体が寒さに硬直して、口も開けなかつたのが常であった。

外の扉の取手には縄をしっかりと巻きつけて置き、手

の凍りつきのを防いだ。直接この鉄の取手を握ったら大変である。一瞬にして手の筋肉が取手に凍りついてしまうのである。やがて四十度以下になると、屋外作業は取りやめることになった。

馬の吐く息も凍りついて、つららとなって下がり、日本のトラックのタイヤは寒さでポロポロになってしまっただけであった。その年の冬は全員が夏服だったので、なおさらに大変だったことであった。しかし未だ体力が残存されておったので、何とかしのげたのだと思う。

外から室内に入るときは、顔や手を感じが出るまでマッサージして入らないと大変なことになってしまうわけだ。一度、二度が一気に襲ってきてしまうと凍傷の恐ろしさも知らされ、また凍傷患者も多く出て、足を切断した者も多数いた。とにかく骨が駄目になってしまうのである。

風俗、習慣の相違も大きかった。水は本当に貴重品で、部落にたった一か所の井戸があるだけである。朝顔を洗う際にも、まず水筒の水を口にふくんで暖め、そして手の平に移してこぼれないように顔の方を動かして顔を洗った。

願望は「食べたい」「早く日本に帰りたい」だけの毎日では、記憶力はすっかり消滅してしまつて、帰国するに際して、戦友の名前を覚えるのに大変だった。一人か二人を覚え込むのに必死の努力をした。

抑留二年目あたりからは「栄養失調症による死亡」が多く、一日に十人に及ぶ死亡者があった。食べ物のお話をしている声が無くなった。死にたいという状況で、小屋に裸にして首すじに捕虜番号を下げただけで積み上げて保安した。近くに仮埋葬する穴を掘るのだが、のみと二十ポンドのハンマーで一日中掘つても二十センチがやっとのことだ。春になってから丘の上に正式に埋葬した。部隊長が亡くなったときに初めて軍服姿の棺に納めて埋葬した。

風俗、習慣の相違で全く困ったのは便所だった。真ん中に小さく丸型に切り込みがあるだけだ。小便と大便は別々に用を足さなければならぬ。これがなかなか簡単に用を済ませることができなかった。もちろん拭く紙は全然ないので、そのままだ。

毎週、身辺の検査があり、読むものは徹底的に取り上げられてしまい、読みたいという意欲はいっぱいだつた。そうした中に、書類による徹底した共産教育が開始された。熊沢天皇等のようなものが配布されたが、余り効果はなかった。

とにかく、強制労働の苦痛は現在になっても明確に思ひ出され、そして、生き抜いて帰国できたことを喜んでゐる。そして、シベリアにおいて亡くなられた戦友のご冥福を祈る。

## ダモイ東京とはシベリアであつた

岐阜県 鈴木善三

昭和二十年八月十五日、正午、重大放送があるので全員ラジオを聞くようにとの部隊長の指令がありました。スイッチをいれると、はるか日本海をわたって伝わる電波は雑音が多くてなかなかキャッチ出来ませんでした。が、そのうち特徴のある陛下のお声が聞こえてきまし

た。耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びとせつせつと訴えられる悲痛な放送を聞きながら、私達はぼうだとして、あふれ出る涙で何もかも見えなくなったのを、つい昨日の出来事のように思い出します。その日から我々にとって生涯忘れることのできない屈辱と悔恨の日々が始まりました。

部隊を放棄、南新京集結、武装解除と目まぐるしい数日が暮れていきました。丸裸のただの人間集団に変わった我々は、毎日のように使役にかり出されました。そして、其の行き先とは皮肉なことに、ついこの間までの私の部隊であつた関東軍野戦貨物廠新京支廠です。山のよりに野積みされた軍事物資をソ連へ輸送するための積込作業です。これが約一か月あまり続きました。そんな仕事一段落の十月初旬、新京残留の全員が駅前に集結させられました。集まった約千人の日本人を前にして、ソ連軍司令官が演説をしました。「貴方達は永い間、日本軍閥のため苦しめられてきましたが、ようやく解放され、内地へ帰ることが出来るのです。なにとぞこれからは幸福な生活を送って下さい」と。そして、捕虜として